

私たち北海道の住宅を語ることはいくつもあります。積雪寒冷／高断熱高気密／省エネ／外断熱・・・もう馴染みのせりふになってますが、しばしばそれらの端々のみをとらえての解釈は御免願いたいと常々感じていました。

この展覧会に「北の住まいから学ぶ知恵」と副題を添えてお招き戴いたので、この際に何か北海道の住宅を俯瞰することばを探してみようと試みた。「北海道住宅史話（上・下）」があった。この本から史実をいくつか頂戴して現在に至る我々が共有している背景の一端をお伝えしたいと思う。

(以下、明朝体記載はこの本からの引用を示します)



遠藤明久著『北海道住宅史話(上・下)』住まいの図書館出版局、1994年

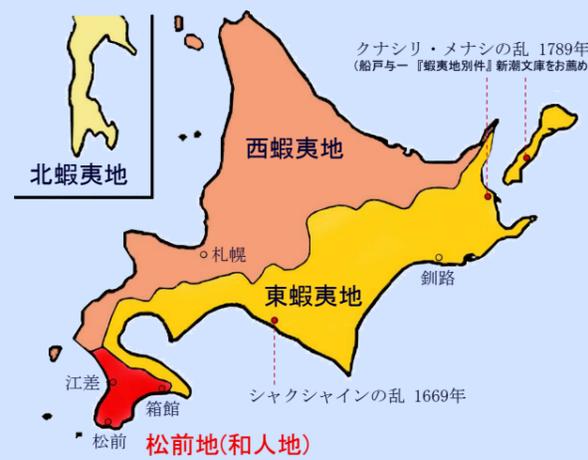
江戸時代

松前藩領であった蝦夷地を幕府直轄統治した時期のこと

最初の屯田農兵の派遣 (上巻35ページ)

寛政12年(1800年)、八王子同心子弟に警備と開墾とを兼ね行う屯田を命じ、東蝦夷地の釧路近郊の原野二か所に入地させる。が、予期のとおりに進まず、病人や抜け出して帰郷する者がでて、失敗、放棄される。

安政元年(1854年)末・・・{中略}・・・「泰平200年、士風柔弱に陥れるの今日、蝦夷の霜雪に鍛錬せしむるの要もある」との意気込みであったが、文久2年(1862年)で、ようやく116人を石狩以南の地に定着させたにすぎなかった。



開拓使の時代

明治2年(1869年)7月～明治15年(1882年)2月のこと

II アメリカをモデルとした開拓使の住宅 (上巻45ページ)

開拓次官黒田清隆をアメリカへ派遣し、アメリカ政府に要請して、H・ケプロン(合衆国政府農務長官)を首班とする専門技師チームの招請を実現する。・・・{中略}・・・

「薄紙様ノ家屋ヲ堅材マタハ石造ニ代エ、北海道住居ノ体裁ヲ改革スルコト」を掲げたのもそのひとつである。

明治5年(1872年)、同使の建築をすべて洋造とする方針を決定する。・・・{中略}・・・札幌を中心に、目的意識を明確にした文明開化の建築風景が現出するのである。



日本建築学会北海道支部編著『北海道の建築1863-1974』丸善株式会社、1975年

IV 黒田清隆開拓長官の先導 (上巻88ページ)

黒田は、明治9年(1876年)9月、開拓使幹部職員に対する告諭の形式で、道民に対して家屋改良について論示する。



日本建築学会北海道支部編著『北海道の建築1863-1974』丸善株式会社、1975年

住宅改良の告諭 (上巻89ページ)

原文が938字にのぼる長文である。口語訳して紹介しよう。

北海道住民の家屋は、従前慣習どおりの構造であるため、はなはだ粗末で防寒の注意はまったくくない。ために厳寒期には寒さに苦しみ、永住の志がくじける憂いが少なくない。・・・{中略}・・・

とくに家屋は防寒上もっとも緊要なもので、旧来の慣習をぜひ改めなければ、人口の増加、産業の基盤の確立は困難である。本使は、官設の建築を逐次西洋形に建設して、道民の模範、誘導の方途としてきた。**ところが、今日になっても住民は趣旨を理解せず、相当の生計を営む者も弊習を墨守し、防寒の注意に欠け依然として粗末な家屋で甘んじている。**・・・{後略}・・・

※ 黒田は薩摩藩の出身、後に第2代首相を務めた